



よつば会だより

2019 年 2 月号

発行:NPO 法人

尾道こころネットよつば会事務局

尾道市 栗原東 2丁目 17-86

TEL・FAX 0848-37-6600

2月に入りました。1月は割と暖かな日が多く、過ごしやすい1ヶ月でした。この暖かさで、庭の紅梅が1月18日に4輪開花しました。去年は初開花が2月18日でしたから、1ヶ月早い開花です。テレビを見ていたら、三原市の三景園でも紅梅が例年より1ヶ月早く咲き始めたというニュースが流れていました。また、庭の椿の花も去年は3月3日に初開花を見たのですが、今年はすでに蕾が大きくふくらんできており、これもまた、かなり早い開花になりそうです。この暖かさのままに春を迎えることになればありがたいのですが、近年の異常気象がもたらしている暖かさかもしれないと思えるところもあり、ちょっぴり気になっています。



動き出した地域生活支援システムの協議



昨年12月25日に尾道市地域自立支援協議会全体会が開催され、出席しました。議題は尾道市地域生活支援システムの協議経過報告でした。尾道市地域生活支援システムは、尾道市の第5期障害福祉計画の中で取り上げられているもので、「地域で、障害のある人や児童とその家族が、安心して生活するために必要な機能を備えた支援システムの整備をしよう」というものです。計画では尾道・御調・向島で1ヶ所、因島・瀬戸田で1ヶ所、拠点整備をすることになっています。準備を進めるために、整備に係る作業部会を立ち上げ、具体的な検討に入っています。その作業部会の協議過程が全体会で報告されました。まだ、3年をかけての整備の1年目で、具体的な形は見えていませんが、これからの協議内容をしっかりと見ていきたいと思っています。



当事者・家族も薬物の知識を身につけよう



「みんなねっと」誌1月号でも、特集記事として「ガイド」が取り上げられていました。みんなねっと編集委員、飯塚壽美さんの記事です。その記事の中に共感を覚える以下のような文章がありましたので紹介します。

「私が家族会に入会したのは、今から23年前のことです。その当時の先輩から、『薬について詳しく医師に聞けない。自分を信頼できないのかと叱られそうで』と聞きました。それに影響されたのか、私は薬物治療に関しては主治医の判断に任せて、家族は家庭での状態を正確に伝えることと考えました。医師による薬物遵守が主流の時代でしたが、今は医師任せであったことを反省しています。医師の処方にとただ素直に従うことがよいのだという考え方は、患者の意思決定による服薬遵守という考え方を経て、現在では診療方針決定過程の共有という、医師と当事者・家族がお互いによく話し合っ、治療を進めるという考え方に変化しています。現在でも私の意見は絶対だという医師が存在することは、大変残念なことです。今は当事者・家族もしっかりした考えを持ち、意見が言えるように、薬物の知識を身につける時代です」

以上ですが、この中で特に共感を覚えるのは「今は、当事者・家族もしっかりした考えを持ち、意見が言えるように、薬物の知識を身につける時代です」というところです。その薬物の知識を身につける材料として「ガイド」は大いに役立つと思えます。しかし、当事者・家族が薬物の知識を身につけ医師と話し合おうとしても、医師がどれだけ当事者・家族の話を真摯に受けとめてくれるかが問題です。飯塚さんの文章にも「現在でも私の意見は絶対だという態度の医師が存在する」とあります。易しいことではありませんが、そうした医師の考え方を変えていくことも必要でしょう。

1月の活動報告

- 13日 当事者との交流会 (サロンよつば)
- 26日 よつば会家族教室 (センターむかいしま)

2月の活動予定

- 10日(日) 当事者との交流会 (サロンよつば)
- 27日(水) 家族の SST (市民センターむかいしま)





書籍「統合失調症薬物治療ガイド」を読んで



よつば会だより12月号に、「統合失調症薬物治療ガイド」(以下「ガイド」とする)が発行されたという記事を掲載しました。その後「ガイド」の書籍を取り寄せて読み進めました。いろいろと参考になる内容があり、改めて「ガイド」の内容を紹介していきます。

「ガイド」の構成は、**第一章** 初発精神病障害、**第二章** 再発・再燃時、**第三章** 維持期治療、**第四章** 治療抵抗性、**第五章** その他の臨床的諸問題の5章からなっています。そして、各章で臨床疑問として、このような場合有用な薬は何か、薬の量は適切だろうかなどの質問を提示して、その質問に対して推奨(すぐれていることを述べて人に勧めること)できる薬の使い方などを述べています。一例を示します。第二章の質問の一つに「統合失調症の再発・再燃時に、抗精神病薬の併用治療は単剤治療と比較してより有効か?」という質問があり、それに対して、まず端的に「抗精神病薬の併用治療を行わないことが望ましいです」と答えています。そして、その後の解説の中でその理由を述べています。ここでは次のように解説しています。

「抗精神病薬の問題点としては、服薬の必要量以上の増加、急性あるいは遅発性の副作用の増加、予測不能に2種類以上の薬剤が互いに影響を及ぼし合うこと、効果あるいは副作用に関与している薬剤の特定が困難になることなどが考えられます」解説はもっと詳しいのですが、ここではその一部を取り上げています。このような質問が5章全体で26例取り上げられています。薬に関して疑問を持っている人が、自分の疑問と同じ質問やそれに近い質問を見出すことができるかもしれません。そして、「ガイド」作成のねらいの一つである、見出した質問のところを医師に示して「ここにこのように書いてあるのですが」と、医師と話し合う材料にすることができるでしょう。私たち家族、同時に当事者も、薬についての知識があまりないままに医師が処方する薬を指示通りに飲んでいて、多くの人の現状ではないでしょうか。医師の専門性を尊重しているところもあると思われませんが、それよりも薬のことが分からないので医師に質問することもできないことから、言われるままになっているところもあると思います。

私の娘が福山の精神科病院に入院していた5年前のことです。病院から、「娘の血小板の数値が正常値15万ぐらいい対し2万ぐらいに減少している。福山市民病院で手当てを受けるために連れて行っている。親も市民病院にすぐ来てくれ」という電話が入り飛んで行きました。市民病院で診察に当たってくれた医師から、「血小板2万という状況は、体内外に出血があると命に関わる危険な状況だ。多分薬からきているものだろう」との説明がありました。その頃娘はデパケンという気分安定剤を飲んでいました。かなりの期間投与されてきました。娘は幸いに半月後には14万ぐらいに回復し、事なきを得ましたが、今思い出してもゾッとするできごとでした。「ガイド」を読んでいて「デパケンは3週間以内の併用に関しては、精神状態の改善効果を期待できるかもしれないが、長期的には陰性症状を悪化させ、血小板減少、肝機能障害、体重増加などの副作用の心配があることから、長期間投与は行わないことが望ましい」という文章を見つけました。この文章を5年前に読んでいたら、当時の精神科病院の主治医と話し合い、命に関わる状況を回避できたのではないかと考えます。同時に、主治医はデパケンの副作用について認識があったのだろうかという疑問が湧いてきました。

このように「ガイド」は、統合失調症患者に対して薬物治療を行っていく際に知っておいたらいいと考えられることを多く掲載しています。**サロンよつば**に「ガイド」を一冊置いています。薬について疑問を持っている人、薬についてもっと知りたい人がおられたら、ぜひ「ガイド」に目を通してみてください。(N.T)